

P05

タベ村初の助産師、アギーの挑戦 地域課題最後のピース「医療」に取り組む

2022年度研修生としてインドネシアから来日したアギーさん。助産師になったきっかけやこれからの意気込みをインタビューしました。



個人情報保護の為、一部内容を伏せて掲載しています。

ご了承くださいませ。

Contents

- 02 ● …… 2023 年度事業方針・計画
- 03 ● …… 2023 年度研修生紹介
アギー・ラミダ・プットリさん、チェリーさん
- 05 ● …… 研修生インタビュー特集
アギーさん/インドネシア
- 09 ● …… **PHD Movement** vol.36
タブコラ事業報告～PHD協会が目指す多文化共生社会～
- 11 ● …… 2023 年度新スタッフ紹介
- 13 ● …… ロータリー米山記念奨学会
シェアハウス「みんなのいえ」
- 14 ● …… PHD 活動紹介 2023 年 4 月～2023 年 6 月
- 15 ● …… PHD News

表紙写真 / 2023 年度第 39 期研修生 アギーさん・チェリーさん



PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT
公益財団法人 PHD 協会

PHD 運動とは 1962 年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの 10 パーセントをささげ、平和 (Peace) と健康 (Health) を担う人づくり (Human Development) をすすめて、共に生きる社会をめざし、1981 年に今井鎮雄 (初代 PHD 協会理事長) と共に PHD 協会を設立しました。

PHD LETTER 153 号

発行: 公益財団法人 PHD 協会
住所: 〒653-0836 神戸市長田区
神楽町 3 丁目 7-4
電話: 078-414-7750
FAX: 078-414-7611
E-mail: info@phd-kobe.org
URL: http://www.phd-kobe.org
郵便振替口座: 公益財団法人 PHD 協会
01110-6-29688

温故知新 岩村語録 その 25

岩村先生、広島でクリスチャンになる



アメリカの宣教師さんがね、(原爆投下後の) 焼跡で伝道しているのにぶつかっちゃったわけです。「罪人よ、悔い改めよ」と。私は言ったんです、「どっちが罪人だ」と。「キリスト教国か何か知らんけどね、原爆で 10 万 20 万という非戦闘員を殺しちゃった、アメリカの方に罪がある」と。そしたら、その宣教師さんが私の足元に跪いて、さめざめと泣いて、お祈りされたんです。「私はもうアメリカには希望がもてません。でも、いま日本のこの若者がね、灰の中から不死鳥のように立ち上がってる。この若者たちの中に、世界を創り直す力をお与えください、神様」と。僕はそのおばあちゃんに惚れちゃいまして洗礼を受けました。

出典: PHD 創刊号



広島で G7、C7 が開催された。ヒロシマから平和を、世界へ。今こそ PHD の P が重要な時代 (さ)

2023 年度 事業方針・計画 全体方針

「続・With コロナの新しい研修事業の

再構築と国内での居住支援事業の両立」

研修事業 ～ 続・With コロナの新しい研修スタイル確立 ～

昨年度、コロナ禍の中で研修事業を再開することができましたが、従来とは違った形での研修事業となりました。2023 年度は当会の特徴である草の根交流を軸とした研修事業を少しずつ復活させていき、質の向上を目指します。特に助産研修は新規開拓が重要になります。また今年度は 4 年ぶりとなるミャンマーからの研修生招聘も実現できました。一年間の研修を無事に終え、安全に帰国してもらうことも大きな目標の一つとなります。

広報・啓発事業 ～ 土台構築の一年 ～

2023 年度は担当交代に伴い、土台固めの一年とします。基本的な広報活動である PHD レター一年 3 回、事業報告書、会費募集チラシ、年末募金募集カレンダーの着実な発行を目標とします。その上で SNS での発信、Youtube チャンネル「草の根」での発信も継続します。

居住支援事業 ～ 支援が届いていない人たちへのアウトリーチとより「深く」を目指した重点支援 ～

2023 年度は「国際協力・交流シェアハウスみんなのいえ」を軸とした居住支援、シェアハウス外の外国人を対象にしたアウトリーチ型の生活相談支援を二本柱として実施します。昨年度に引き続き、より困窮度が高い人たちが孤立して支援が届いていない外国人に支援が届くことを目指します。昨年度に開始したウクライナ避難民への支援については、アウトリーチ型の生活相談支援の一部として継続していきます。

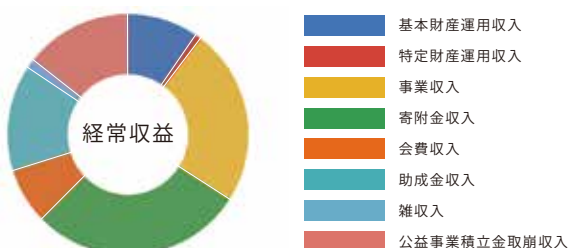
多文化共生事業 ～ 日本社会への啓発 & 外国人の人達の活躍促進 ～

PHD 協会のミッションである「共に生きる」を具現化するために多文化共生社会を目指します。多文化共生社会を実現するには日本人の理解促進や行動変化も重要だと考えています。岩村先生も宇宙船地球号の乗組員として日本人の変化を訴え続けておられました。具体的には各種発信や日本語教室、就労支援等を通じて外国人の方達はその個性や能力を活かして、社会で活躍できる状況に寄与していきます。

経常収益

基本財産運用収入	4,000,000
特定財産運用収入	350,000
事業収入	9,950,000
寄附金収入	12,030,000
会費収入	3,150,000
助成金収入	6,000,000
雑収入	520,000
公益事業積立金取崩収入	6,026,910
合計	42,026,910

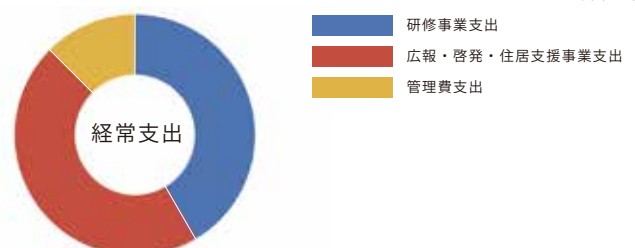
(単位：円)



経常支出

研修事業支出	17,455,000
広報・啓発・住居支援事業支出	19,307,910
管理費支出	5,264,000
合計	42,026,910

(単位：円)



2023 年度研修生紹介 アギーさん



2002年のインドネシアからの研修生ミミさんを母に持つアギーさん。常に冷静で立ち姿や指先の所作が美しい。タベ村初の助産師であるアギーさんは若いながらも既に150人の新生児を取り上げたという、村を背負う逞しいホープです。

村の出生率は高く人口も右肩上がりであることから助産師の担う役割はとて大きいです。早朝から時には深夜まで、クリニックで母子に向き合う日々、バイクに跨り母子の家庭訪問も大切な仕事のひとつ。血圧の高い

妊婦さん、情報不足による新生児の栄養バランスの欠如、母親教室の不足など課題は尽きないです。

そんな中、村の期待を一身に背負っての来日、学ぶことは数知れず1年間を走り抜ける日々になります。夢は地域に自分のクリニックを持ち、妊婦さん赤ちゃんに近い場所でそれを見守る事。彼女の若い力で村の出生事情がより安定し、お産への理解が深まり、村の健康ひいては村の未来が守られるようにと願います。

アギーさんの研修

母子の健康

村では20年くらい前から妊婦の高血圧症が大きな問題となっています。インドネシア製の体に悪い化学調味料や人工甘味料がタベ村にもどんどん入り、加えて塩、砂糖、油を使った飲食品が多いです。このため、「糖尿病・高血圧・痛風」が増加傾向にあります。母子の健康を促進するためにも、地域、父母の啓発事業、妊婦教室の実践の方法について知見を得たいと考えています。



自然分娩の勉強

地域によりますが、インドネシアでは約40%が帝王切開分娩を選択すると言われています。母体の傷跡、またお産の度に切るといふリスクが大きいです。自然分娩では当日に帰宅、帝王切開では入院期間が短く、適切な処置が施されないまま術後の傷口が膿んでいる場合もあります。こうした背景から、自然分娩への理解の促進の一助になりたいと考えています。

出産前後のケア

インドネシアでは、母子健康手帳は配られるものの活用されていない例が多く、出産まで一度も書かれていないこともあります。日本では、インドネシアと比べると病院や保健所などで産後に教えてもらえることが多いと聞きます。助産師にとって母子健康手帳が重要であり、手帳の有効活用について日本の例を参考にしたいと考えています。食事や運動についても何をすべきか、また妊婦検診と予防接種の必要性の意識づけなど、助産院や産婦人科での実地研修で学びを深めたいです。



滞在家族／葛原時寛さん 香織さん

アギーさんが来てから2カ月くらいしか経ってないのにもうずっと一緒に生活しているように馴染んでいます。とても自然体で20年前に我家にホームステイしていた彼女の母親のミミさんを思い出します。よく躰されているのか、何でもきちんと出来、とても感心させられます。私が一番うれしく感じるのは、とにかく好き嫌いが無い事。毎日「おいしい。おいしい。」と言って何でも食べてくれる事です。帰国後はアギーさんの夢であるクリニックを誕生させて下さい。応援しています。

タベ村初の助産師、アギーの挑戦

地域課題、最後のピース「医療」に取り組む

2023年度研修生としてインドネシアから来日したアギーさん。
助産師になったきっかけやこれからの意気込みをインタビューしました。

ア
ギ
ー
さ
ん

アギーさんの
インドネシアでの一日

- 05:30 起床、お風呂とお祈り
- 06:00 朝の準備と朝食
- 07:30 クリニックへ出発
到着後、診療準備と掃除
- 08:00 診療開始
- 12:00 休憩、お祈り
- 12:10 昼食
- 12:30 診療再開
- 18:15 休憩、お祈り
- 18:30 夕食
- 19:00 クリニックで仕事
- 21:00 クリニックから帰宅
- 22:30 就寝



Q. 日本に来た動機を教えてください。

アギー(以下 ア): 助産師になったことです。インドネシアの学校では勉強しましたが、日本の進んだ知識や経験を学びたいと思って来ました。もう一つは母であるダルミアティス(ミミさん・2002年度研修生)の存在です。ずっと母を見ていますが母は村をよくするためにいつも努力してきました。私も日本で勉強して村に貢献したいです。

Q. 大切にしていることは？

ア: 母からずっと「礼節を持って人に接しなさい」と言われてきました。友達にも目上の人にも年下の人にも礼儀と尊敬を持って接することを心がけています。

Q. 助産師になったきっかけは？

ア: タベ村には助産師がいないことです。そのため、他の村まで行って診察してもらわなければなりません。私が大学に入ったとき、母はカデール(母子保健活動の保健ボランティア)でした。母が、「ここに助産師がいたら、村の人と近いから、村の人のためになる」と言い助産師になることを勧めました。私はそのとき高校卒業前で助産師になるか警察官になるか迷っていました。助産と警察、両方を検討して、親戚みんなと話し合い、両親が導いてくれた道を自分で選びました。

Q. 今までに何人の赤ちゃんを取り上げましたか？

ア: 助産師となって1年半働き、約150人を取り上げました。最初の赤ちゃんを取り上げた時は感動と安心感で震えました。他には5.2kgある赤ちゃんのお産の時はへその緒が巻き付いたりして大変でしたが、今は健康です。

Q. 村の健康の課題を教えてください。

ア：お母さんたちの血圧が高いことと、発育阻害の子どもがたくさんいることです。発育阻害についてはインドネシアの母子手帳に成長曲線を記載して把握しますが、子どもに与える食べ物の栄養バランスに問題があり、体重と身長が増えていきません。好き嫌いがある子どもにずっとお菓子ばかりを与えてしまっているから、おなかがすいたという感覚がなくて栄養が入ってこないです。

Q. お産の課題は？

ア：最近では帝王切開を選ぶ人が多いです。村では知識が不足していて、とにかく痛さを逃れるために帝王切開を選ぶ人が多いです。自然分娩が約60%、帝王切開が約40%です。帝王切開は危険が伴うし、3人までしか産めません。出産後のケアも大変になります。なにより遠くの都市の病院に行かないといけません。道も悪く、途中でトラブルの可能性もあり、本当に大変です。

Q. 日本で勉強したい事を教えてください。

ア：まず、妊娠と出産について。それから赤ちゃんの体重を増やすのよいベビースパのこと、母親学級でやる体操やヨガ、オキシトシンマッサージ(母乳マッサージ)についても学びたいです。

Q. 帰国したら村の為に何をやりたいですか？

ア：まずは母親教室を開き、正常出産を勧めたいです。ヨガや体操、マッサージなどで痛みを抑えられることを教えたいです。そして、発育阻害の子どもを栄養の面から救いたいです。いつも地域に寄り添っている自分がやりたいです。大きな目標としては、アギークリニックも作りたいです。もしクリニックができれば、母親の健康へのアクセスが改善されます。妊娠している母親が自分で歩いて行ける距離にクリニックがあると便利で、村のためになると思います。



2023.7.31

研修生インタビュー特集

タブコラ事業報告 ～ PHD 協会が目指す多文化共生社会 ～

事務局長 坂西卓郎：文

タブコラとは？

PHD協会では2021年7月より国際協力機構（以下、JICA）と協働で「兵庫発！多文化共生のための市民社会とビジネスセクター連携構築プログラム～外国人労働者とのより良い共生に向けて～」に取り組んできた。協力団体はエフエムわいわいさんに入っていた。多文化コラボ事業、略してタブコラである。事業期間は2023年8月までの2年2ヶ月間。執筆時点で事業の終わりが見えたので概要を報告させていただきたい。

タブコラ事業の上位目標は「外国人労働者を取り巻く課題の改善と多文化共生の推進」である。大きなテーマとなっているが、ポイントは「外国人労働者」にフォーカスを当てている点である。新聞等でも報道されているが、技能実習生に代表されるように外国人労働者を取り巻く環境は厳しい。シェアハウス「みんなのいえ」にも2023年度に入ってからだけで5名の元技能実習生が失踪して入居してきた。シェアハウスはセーフティネットとして機能しているが、そうならない状況を作るための事業がタブコラである。

タブコラ概要

団体名称	代表団体：公益社団法人 PHD 協会 協力団体：特定非営利活動法人エフエムわいわい
実施期間	2021年6月～2023年8月（2年3ヶ月）
実施場所	兵庫県（三田市、加東市、神戸市長田区）
タイトル	兵庫発！多文化共生のための市民社会とビジネスセクター連携構築プログラム～外国人労働者とのより良い共生に向けて～
目的	【上位目標】 外国人労働者を取り巻く課題の改善と多文化共生の推進 【本事業の目的】 外国人労働者を雇用する企業や受入業務を行う団体等のビジネスセクターと NGO 等の市民社会が連携し、地域住民との相互理解や交流を生み出すモデルケースを作ること。

タブコラ事業は3つの活動を柱にしてきた。

1. 兵庫県三田市における社会福祉 × 多文化共生
2. 兵庫県加東市における畑 × 多文化共生
3. 神戸市長田区における「外国人版トライやるウィーク」

社会福祉 × 多文化共生

本稿では1. についてご報告させていただきたい。

まずアウトリーチで三田市国際交流協会さんにお伺いさせていただいた際に以下のニーズを聞いた。「外国人労働者の増加」、「相談に対応できる仕組みを強化したい」、「社会福祉協議会とつながれない...」。

折しもコロナのまん延で、日本人だけでなく、外国人にも生活困窮者が増えていた時期である。特に飲食業などで雇止めになる外国人労働者が多くいた。その対応として、社会福祉協議会（以下、社協）の緊急小口資金を活用する方も増え、社協としてはある種の黒船のように突然、多くの外国人に対応することになり、困っている窓口も多かった。



▲三田での取り組みをまとめたブックレットの表紙

そこで、タブコラチームとして社協と国際交流協会の連携を創出できないかと取り組んだ。その結果が2021年3月1日に開催した「三田市社会福祉 × 多文化共生セミナー社会福祉における外国人支援～分野を横断した支援体制のために～」で

ある。会場とオンライン合わせて計78人が参加してくれたが、内17名が国際交流協会、26名が社協の方であった。

参加者の感想として印象的だった国際交流協会の方のコメントを紹介したい。「外国人については自分たち(国際交流協会)だけで支援して、誰も助けてくれないと思っていたが、社協の方たちも色々と考えてくれていることを知れた」。外国人支援の現場の課題がリアリティを持って語られており、同時に連携への第一歩となったことが表現されている。

その後、三田市社協と三田市国際交流協会では、情報共有や個別ケース検討のための場として「さんだ多文化ふくふくネットワーク会議」という連携の会を月一回開催することとなった。お互いの専門領域や活動地域の違いを補完し、制度と人をつなぐ重要な場となっている。具体例の一つを紹介したい。ある海外ルーツの中学生が修学旅行に持参するお小遣いがなく参加を躊躇していたが、社協の善意銀行によるお小遣い応援プロジェクトの支援を得て参加できた。制度(社協)と人(国際交流協会)がつながり、中学生の笑顔を生み出した事例だと言える。現在、三田での取り組みをまとめたブックレットを作成中である。ご興味ある方はお問い合わせください。

P HD協会の役割

「ネットワーク」という言葉がある。誰でも知っている言葉だが、本事業の中で「ネットワークはネット、関係性だけでは機能しない。ワーク、協働、一緒に汗を流すことが大切だ」と学んだ。

今回の社協と国際交流協会の事例でも、「出会い」だけでは機能しなかったと思う。最初に社協に協働の申し入れをしに行った時の緊張感は独特だった。その後、セミナーの開催に向けて、双方が歩み寄り、一緒に汗を流したことで、お互いに信頼関係が生まれた。出会いとワーク、双方が大事だということを痛感したが、そこをつなぎ、伴走する役割をPHD協会が担えることも知ることができた。今までPHD協会が国際協力で培ってきた外部者としての経験や事務処理能力を活かすことができたと感じている。



◀兵庫県北部で漁業技能実習生のヒアリングを行った際の写真

P HD協会の多文化共生社会へのアプローチ

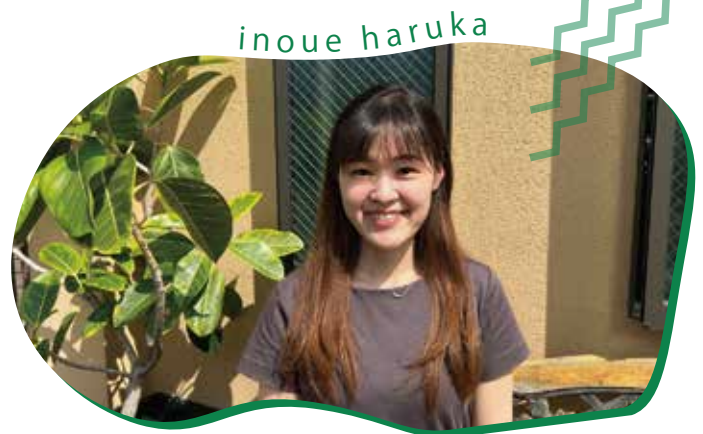
PHD協会は共に生きる社会を目指して、「日本における価値観・生活様式の見直し」を模索してきた。岩村先生は「我々は自分のためにも生き方を変えなければならないところ迄来てしまいました。我々が着たい、見たい、食べたいという欲望追及だけを毎日の生活の目的とするとなると、発展途上国の草の根の人達に、いつまでも貧しく病んで居てもらった方が都合いい」と指摘された。

当時は途上国の問題を指摘されていたが、この構造が今は日本国内にある。その解決は一朝一夕ではできないが、共に生きる社会を目指して一歩ずつ歩んで行きたい。タブコラをはじめとする多文化共生事業で、草の根のネットワークを作り、「知ること」そして「知る機会を提供していくこと」を啓発事業として取り組む。その結果差別がなくなり、共に生きる社会が生まれると信じて。

2023 年度新スタッフ紹介

いのうえ はるか 井上 遼香

広報・啓発担当



自己紹介

初めまして、井上遼香と申します。愛媛県出身で大学4年間は京都で過ごしました。学生時代のカンボジア渡航をきっかけに国際協力に興味を抱き、カンボジアで運動会や教育活動をする学生団体を設立しました。また、現地の人々とより深く関わりたいという思いが強くなり、アンコールワットの街シェムリアップに日本語教師として4カ月間滞在しました。

その経験から自分の無力さを痛感し、大学卒業後は銀行に就職しました。数年間胸の内に秘めた国際協力への気持ちが溢れ、この度念願の NGO 職員になることが出来ました。一方的な支援ではなく、共に学び・共に成長することが大切だと考えており、PHDではそれが出来ると確信しています。未熟な私ですが、これからどうぞ宜しくお願い致します。

他己紹介 総務・ファンドレイジング担当 中村朱里
日本語教師やファイナンシャルプランナーなど多彩な経験とともに、念願だったという NGO の仕事に飛び込んでくれた、井上さん。メインは広報・啓発担当ですが、研修生やシェアハウス入居者のフォローなど、入職したばかりとは思えない守備範囲でPHDの活動を支えてくれています。難関といわれる、若手人材育成のための外務省 NGO インターン・プログラムにも選ばれ、これからの活躍が楽しみです！

たむら かな 田村 華奈

居住支援・研修担当

自己紹介

皆様初めまして、田村華奈と申します。2年前には国内研修生としてお世話になり、国際協力に関わる上で土台となる経験をさせて頂きました。その後は複雑化する社会課題に立ち向かうべく、中央～東南アジア、東欧へ渡航し、教育や平和などの多分野、異なる地域や社会など様々な壁を「越境」した自分だけの経験をして参りました。

そんな中、收拾がつかないほど世界は広がったけれど、同時にできることは限定されました。「一体私に何が出来るのか」この問いに向き合う度、堂々巡りで苦しかった私が今はPHDという大きな看板のおかげで、前を向き自分の足元から活動が来ています。心震える場所で、当事者に伴走できるこの環境や支えてくださる皆様への感謝の気持ちを胸に、これからも目の前の人と関係を紡いで参ります。まだまだ未熟ですが、PHDの一助となるべく、精一杯努めますので何卒宜しくお願い致します！

他己紹介

事務局長 坂西卓郎

2021年度の国内研修生。その後、ウズベキスタン、カンボジア、ルーマニアで国際協力の現場を経験し、大きく成長して帰神。もともと類まれな意欲と行動力を備えていたが、そこに実行力も加わった印象。行動力がありすぎて時折危なっかしいがそれも魅力。「無力感」という悔しさを原動力に、社会を変えていく change メーカー。国内研修生から研修担当という流れは、納堂さん(現評議員)、坂西に続く三人目。PHD ネイティブとして、次世代を担って欲しい。皆さん、愛のある厳しさで育ててやってください。

多文化共生インターン自己紹介

おおいずみ も え
大泉 萌恵



自己紹介

はじめまして、兵庫県立大学看護学部3回生の大泉萌恵です！大学の副専攻では、フィールドワークに出る機会も多く、在留外国人支援・国際協力について学んで来ました。その一方で、自ら直接関わり活動していく機会がなかなか作れずにいました。

しかし、今回良いご縁があり、PHD 協会で活動させていただけることになりました。この頂いたチャンスを活かし、医療者として支援に携わりたいと多くのことを吸収し、成長していきたいと思えます。まだまだ知識も経験も浅い私ですが、少しでも力になれるよう頑張っていきます。よろしくお願い致します。

他己紹介

居住支援・研修担当 田村華奈

もえさんとの出会いは大学のとある講義。単位にならない講義を自分の興味のまま受講する変わり者は何千人の学生の内、私たち2人だけ。国際支援に興味を持ち、温和で愛らしい人間性を兼ね備えた彼女は「若い力で社会を変革させよう」という私の込み上げてくる想いに共鳴してくれた大切な1人でもあります。PHDでの経験が大きな分岐点となり、これからの社会を作る同年代の仲間として、共に素晴らしい経験が積めることを願います。



他己紹介 みんなのいえ施設長・研修担当 濱宏子

PHD スタッフから、絶大な信頼を寄せられるミョーさん。その姿は研修生や困窮外国人に寄り添う友のようでもあり母のようでもあります。日本人顔負けの美しい日本語はどこで習得したのであろうか、聞いていて耳に心地良いです。多文化共生インターンとして通訳やミャンマー人相談者の聞き取りに力を貸してくれる頼もしい存在のミョーさん。PHDでの学びを活かし、これから日本で生き抜く力を身につけ、大きく羽ばたいてほしいです。

イタンダーミョー

自己紹介

初めまして。私は2020年11月にミャンマーから日本に来た留学生イタンダーミョーです。日本に来たきっかけは世界で有名な日本の技術と日本語を学ぼうと思ったからです。最初に神戸KR学院で日本語を一年半勉強してから、東京国際ビジネスカレッジ神戸校のライフキャリアデザインという学部で学んでいます。そしてPHD協会には2022年から今まで多文化共生インターンとして研修しています。私は将来日本でエンジニアや通訳の仕事に関係がある会社に勤めたいので、日本のルールや事務など様々なことをPHD協会で研修しています。

日本に来て3年間近く経ち、母国と違う文化やマナーなどが分かってきて、住みやすくなってきました。日本はルールに厳しいですが、日本人と外国人は平等に暮らせます。もう一つ、日本で好きなことは男女の差別がなく生きられることです。皆さま今後ともよろしくお願ひいたします。

ロータリー米山記念奨学会

2023年度は米山奨学生として PHD 協会の研修生 2 名を受け入れていただきました。

2023 年度のお世話クラブとカウンセラーの方々



井本 季伸さん

篠山ロータリークラブ

アギーはインドネシア出身で助産、保健衛生を研修テーマに 4 月から来日しています。毎月 1 回篠山ロータリークラブの例会に参加頂き、日本での活動や研修の報告を楽しみにしています。日常生活では慣れないことが多いと思いますが、克服し有意義な 1 年となることを願っています。

篠山ロータリークラブのご紹介

インドネシアの研修生がいつもお世話になっています。風光明媚な丹波篠山の四季に触れることができる研修生、春の新緑に、冬の雪に、おいしい食事に毎年感嘆の声を上げています。歴代カウンセラーの皆さまと元研修生が長きにわたり繋がっており、今もお父さんと呼び慕っている研修生が多いのも特徴です。お世話クラブのみならず、研修にも力を貸して下さる頼もしいクラブです。

波川 幸枝さん

川西ロータリークラブ

コロナの関係で 3 年振りにミャンマーの方にお会いでき本当に良かったと思っています。お国柄、派手に日本で動くことは困難だと思いますが、この一年間、充実した心に残る年にして頂きたいと思います。またカウンセラーとして、日本の生活や文化に接する機会を提供したいと考えています。私たちは、長年ミャンマーの方々と交流を深めてきましたが、残念ながら未だにミャンマー語が分かりません。毎月 1 回のクラブ訪問時にミャンマー語を教えて頂くことも計画して、皆で楽しみにしています。

川西ロータリークラブのご紹介

長きにわたりミャンマーの研修生を受け入れてくださっている川西ロータリークラブ。アットホームで温かく、ミャンマーへの愛に溢れ、いつも研修生の良きお父さんお母さんでいてくれます。今回は 3 年ぶりのミャンマーからの研修生来日を心から喜んでくださっています。常にミャンマーの情勢を心配し、研修生と共に笑い共に泣いてくださる頼もしい川西ロータリーの皆さまに心から感謝申し上げます。

シェアハウス「みんなのいえ」便り

励まし、やがて励まされる日々

シェアハウス開設から 3 年近くが経とうとしている。困窮外国人の悲しみや苦悩に触れる傍らで、喜びに触れることも数知れない。喜びとは、シェアハウスから見送った大切な入居者の方たちが幸せな生活を送る事に他ならない。



辛い思いをしてみんなのいえに逃げてきた漁業の技能実習生 Y さんが、新しい仕事場の大型漁船からイカを送ってくれた事があった。ただのイカではない、彼の頑張りが詰まった誇らしい贈り物だった。あんなに美味しいイカは食べたことがなかった。私は今もその容器を捨てられずにいる。



行く当てのなかった H さんは食事が不規則だったのか身体がとても細く、私は来る日も来る日も「ちゃんと食べなさい」と言い続けた。「ずっと食べなさいばかり言われた」と、今もそれを笑い話のように話す H さん。今は努力して介護の仕事をごなし、お年寄りを支える側になった。死にたいと思うこともあったけど PHD に励まされた、だから人のためになることをしたい、と月々の給料から困窮外国人のために寄付を続けている。人が人の思いに触れ、それが繋がっていくとは何と素晴らしいことだろう。

みんなのいえ施設長 濱 宏子

PHD 活動紹介 2023.4~6

4月

- 01 「分断が進む社会において、市民社会の役割とは」講演
- 03 PHD 協会辞令交付式、職員研修
- 04 多文化共生のための国際理解・開発教育セミナー運営委員会
- 06 定例スタッフ会議
NGO-JICA 協議会・多文化共生分科会協議
- 08 関西NGO協議会 お花見交流会
- 09 2023 学年度ロータリー米山記念奨学生オリエンテーション
- 10 NGO 神戸外国人救援ネット運営委員会
神戸YMCA 大会実行委員会
- 12 ふくふく会議
ピープルポート協議
HP 協議
- 13 神戸市国際課協議
- 14 HYOGON 運営委員
- 17 神戸親和大学 講義
- 18 外務省 NGO インターン説明会
- 21 長田警察、神戸新聞来訪
- 22 神戸ポートワイズメンズクラブ被災地支援チャリティーコンサート
- 24 HYOMIC 幹事会
関西 NGO 協議会理事選挙管理委員会
- 26 公益法人 NGO 連絡会
はっぴーの家ろっけん来訪
難民事業本部来訪
- 27 神戸 NGO 協議会例会
定例スタッフ会議
みんなのいえ 1名入居
- 28 N ビボ第 4 回経営チーム勉強会「国際協力 NGO の成長と停滞要因」
大吉さん（アフナルさんホストファミリー）来訪
- 29 岩坂正雄さんを偲ぶ会

5月

- 02 神戸親和大学「国際ボランティア論」講義
本田さん（場とつながりの研究センター）来訪
- 03 草加さんを偲ぶ会
- 08 神戸親和大学「国際ボランティア論」講義
コープ魚住学習会
NGO 神戸外国人救援ネット運営委員会
- 10 プラスネット来訪
- 11 神戸新聞取材
神戸市シルバーカレッジ 講義
神戸YMCA 大会実行委員会
みんなのいえ 3名入居
- 15 神戸親和大学「国際ボランティア論」講義
- 18 フードバンク関西
PHD 協会 会計監査
環境科学研究所 訪問
- 19 杉山さん（渋谷助産院）来訪
兵庫県いなみ野学園 講演
- 20 篠山ロータリークラブ 60 周年記念式典
- 22 神戸親和大学「国際ボランティア論」講義
- 23 PHD 協会理事会
- 25 職員研修「メタファシリテーション」
- 27 米山ロータリーオリエンテーション・ケーニヒスローネのケーキ研修
メロディ 訪問

- 29 公益財団法人ひょうごコミュニティ財団 真如苑・ひょうご多文化共生
基金 2023 年度（第 7 期）キックオフ・ネットワークミーティング
コープともしびボランティア振興財団 理事会
NGO 神戸外国人救援ネット 理事会
- 30 移住連続入門講座 第二回
- 31 ワンフェスユースアドバイザーグループミーティング
定例スタッフ会議

6月

- 02 HYOGON 運営委員会
- 03 第 39 期研修生来日報告会
- 04 KSC 交流会
- 08 令和 5 年度外務省主催 NGO インターン・プログラム
新規採用団体インターン向けオリエンテーション
浜地さん（口腔衛生指導者）来訪
- 09 令和 5 年度外務省主催 NGO インターン・プログラム
新規採用団体インターン向けオリエンテーション
兵庫共助会
- 12 WAGBEN 出席
- 14 評議員会
- 16 兵庫県国際局国際課ウクライナ相談
- 18 少子化日本の未来を考えるシンポジウム 2023
- 20 NGO-JICA 協議会 多文化共生会議
高木さん（手工芸品指導者）来訪
- 22 甲南女子大学 講義
関西学院大学 講話
NGO 外務省定期協議会連携推進委員会
- 23 JANIC 通常総会
- 24 神戸YMCA 大会
- 25 ひょうご福祉ネット総会
- 26 リとるめいと訪問
和田山高校 講演
平生園 訪問
- 27 HYOGON 総会
NGO-JICA 協議会 NGO 会議・年次総会
ひょうごコミュニティ財団協議
- 29 フードバンク関西情報交換会
- 30 NGO-JICA 協議会 多文化共生会議

PHD News

神戸新聞に掲載していただきました！

2023年6月19日

研修生、医療や教育の夢語る

2023年6月3日に第39期研修生の来日報告会を実施しました！来日後2カ月間、日本語を猛勉強した研修生2名。自分の地域についてと日本で頑張りたいことを堂々と日本語で発表してくれました。これからの2人を応援してくださいと幸いです。

▼ホームページへ



▼各種SNSへ



各種 SNS 更新中！

「PHD協会」と検索してください。上記のQRコードからもご覧になれます。

PHD 事務所のここが好き！

○月×日のPHD協会

坂西 なんでも言えるところ。時に喧嘩のような議論になることもあるが、それも○。そういう意味では次は「PHDのここが嫌い」でもいいかも。

濱 事務所の裏口。進路を決め、未来へ旅立つ入居者を見送る場所。ある入居者とは再会を誓って2人で泣いた。喜怒哀楽のドラマが生まれる茶色い扉。

田村 人と関係性が好き。あるミャンマー人はPHDが大好きで何かと理由をつくって事務所に来る。皆が毎日彼の名前を呼ぶ。連帯感MAXな職場！

中村 長田区という立地。多文化共生の歴史ある地域で先達から地域づくりの極意－顔を合わせて丁寧に話を聞く－を学ぶ日々。流れ者人生も卒業か？

ミヨ一 国際交流。研修生アシカとブディとの出会い。関係性が近くて兄弟のよう。特にアシカは妹のような存在で、今もSNSでやりとりをする関係。

井上 皆さんからの支援。担当職員として寄付や切手の管理を担当。日々届く支援という温かい気持ちに励まされる。「寄付するって特上の真心」By 遼

以上、外出が多くて事務所で会えたら奇跡順。